

原 著

看護学生の学年別看護師イメージと キャリアコミットメントの変化

Changes in Nursing Students' Image of Nurses Based on the Academic
Year and Their Career Commitment

吉澤裕子 山口さつき 山田直行

Hiroko YOSHIZAWA, Satsuki YAMAGUCHI and Naoyuki YAMADA

旭川大学保健福祉学部保健看護学科

キーワード：看護学生，看護師イメージ，キャリアコミットメント

Nursing Students, Image of Nurses, Career Commitment

抄 録

本研究の目的は、看護学生の志望動機、看護師イメージおよびキャリアコミットメントについて、学年による特性を明らかにすることであった。看護系大学の1～4年生230名を対象に質問紙調査を実施した。その結果、学生は、看護職にあこがれそれを将来の職業につなげるという目的意識をもって入学していることが明らかとなった。入学当初は家族の要因が志望変化に大きく影響するものの、学年が進み臨地実習の経験が増えてくると、家族よりも実習環境の要因が大きく影響していた。看護師イメージとして、「職業的自律」「興味関心」「情緒的魅力」の3因子を抽出した。看護師イメージの学年間比較では、「興味関心」「情緒的魅力」において1年生の得点が3年生よりも有意に高く、看護の学びを深めることにより、現実的な厳しさや難しさを感じていることが明らかになった。さらに、キャリアコミットメントの学年間比較では、「情緒的要素」「計算的要素」「規範的要素」のいずれの組み合わせにも有意差はなかった。4年生は他の学年より臨地実習の経験があるにもかかわらず、量的な差がなかったのは、自分の経験の中で看護をどう認知しているかによると考えられる。今後、質的な検討も含めてさらに調査を進める必要がある。その上で、看護基礎教育において、学年の特性を考慮した支援方法の工夫が求められると言える。

The objective of the present study was to clarify the characteristics of nursing students by their academic year in terms of their motivations, image of nurses, and career commitment. We conducted a questionnaire survey on 230 nursing university students from the first to fourth academic years. The result showed that students entered the university with a sense of purpose that their admiration of nurses leads to the future occupation. Although family-related factors had a strong influence on changes in students' wishes at the start of the school, as their academic year advanced, students had more experience in clinical training, and factors associated with the training environment became more influential. As an image of nurses, we extracted three factors: "occupational autonomy," "interest," and "emotional appeal." When their image of nurses was compared based on the academic year, the score of the first year was significantly higher than the third year for "interest" and "emotional appeal." As they learn more about nursing, they experience real hardship and difficulties. In addition, we compared the career commitment of nursing students based on their academic year. There was no significant difference in any combination of "emotional elements," "computational elements," and "normative elements." The fourth-year students had more experience with clinical training, yet they did not present a quantitative difference. This was probably dependent on how students acknowledged nursing within their own experience. In the future, further study is necessary including qualitative examination. In basic nursing education, devising support methods that consider characteristics of each academic year consider the characteristics of each academic year are desired.

I. 緒 言

近年の日本社会における高齢化に伴い、医療政策は入院医療中心から地域生活中心へと方針転換している。そのような状況において、専門職である看護師には、臨床に止まることなく生活支援者としてのキャリア形成がますます期待されている。日本看護協会は、2025年に向けて少子・超高齢・多死社会を迎える中で、あらゆる施設や場で活動可能な看護師の育成・教育支援、継続性の強化が求められるとし、看護師の能力開発・評価システムの1つである「看護師のクリニカルラダー」を開発した¹⁾。看護師のクリニカルラダーは、個々の能力段階を確認しながら自己研鑽や人材育成することを目指しており、全国的に活用することが推奨されている。

このようなキャリア形成への期待が高まる中で、看護基礎教育における学生支援が重要になってくる。なぜなら、看護基礎教育は看護師としてのキャリアの出発点であり、後のキャリア発達に影響を及ぼし得る。そこで、現在の学校教育に視線を向けると、文部科学省が行った調査の中で、高校生が進学を希望する理由として、「将来の仕事に役立つ専門的知識・技術を修得したい」ことが最も多いにも関わらず、「将来の職業に関連する知識や技能」について、約4割の学生は「これまでの授業経験は役立っていない」、約8割の学生は「自分の実力は不十分」と回答したことから、学校教育におけるキャリア教育・職業教育の充実が課題となっている²⁾。また、看護系大学に入学する学生の志望動機について、入学する学生全てが入学当初から看護師を目指しているとは限らないとの指摘もある³⁾。そのような曖昧な動機の中での大学生活は、他学部受験や進路再考のために休学や退学する学生がいるのと同じように、看護師になることを決意する時期でもありとも述べている。では、何が看護基礎教育を受ける学生の学修継続を支えるのだろうか。本研究では、学修継続に関連する要因として、看護師イメージとキャリアコミットメントに注目する。

様々な志望動機を持って入学したであろう学生には、看護師へのあこがれや専門性など、各々の看護師イメージが存在することが想定される。従って、イメージこそが人の行動の目標となり、行動を指導し制御するものである⁴⁾と言える。また、Bouldingは、人間の行動はイメージに依存しており、イメージが変わればそれに応じた行動をするようになる⁵⁾と述べている。これらのことから、必ずしも肯定的イメージを

持たずに入学したとしても、看護師としての学修を続けることにより、肯定的なイメージが形成され、その肯定的イメージがさらなる学修継続の支えになると言えるのではないだろうか。そこで、本研究では学生が持つ看護師イメージを調査する。先行研究として、室津らは看護師イメージを「専門的職業要素」、「看護師の外観的要素」、「職業的魅力」の3つとし、これらのイメージが学年進行に伴い低下する傾向があることを報告した⁹⁾。ただし、先行研究では様々な指標が用いられており、看護師イメージの概念が統一されていない⁹⁾¹⁴⁾。そこで、看護師イメージの概念を検討することから始める。

学修継続と関連する用語として、キャリアコミットメントがある。コミットメントとは、特定の「あるもの」に対する同一化の強さや関与といった心理的状态を示す⁶⁾。Allen & Meyerは組織的な視点から、コミットメントを功利的・情緒的・規範的の3要素に分類している⁷⁾。一方、Blauは、専門職の視点からキャリアコミットメントと銘打ち、「専門を含めた各医療スタッフの、自己の職業への態度」であると定義している⁸⁾。また、室津らは、Blauの定義を踏まえ、看護学生のキャリアコミットメントを「職業人として自己をどのように決定し、自己がそれにどのようにかわるかという職業コミットメントのことである」と説明している⁹⁾。本研究は、看護学生のキャリアコミットメントを、「看護師になるという決意を育み、困難があっても学業を続けていこうとする姿勢」と定義する。

石田らは看護師のキャリアコミットメントが、愛着や好意（例えば、看護が好き、素晴らしい職業であると言える）に基づく「情緒的要素」、損得勘定（例えば、他に良い選択肢がなかった、辞めるとかなりの損失が伴う）に基づく「計算的要素」、そして義務感（例えば、辞めたら親や親せきにあわせる顔がない）に基づく「規範的要素」からなると考えた。そして、「情緒的要素」「計算的要素」「規範的要素」の変化について、学年間（1～3年）の比較を行った結果、情緒的要素は2年が1年と3年よりも低く、計算的要素は2年が1年と3年よりも高く、規範的要素は2年が1年よりも高いと報告した¹⁰⁾。つまり、看護学生のキャリアコミットメントの特徴として、2年目に情緒的要素が低下して計算的要素や規範的要素が高まるが、3年目には再び1年目の水準まで戻ると言える。ただし、石田らには4年目に関する報告がないため、最終学年を迎えた学生がどのようなキャリアコミットメントを持っているのかについてはわからない。同様の指標を

用いた室津らでは、1～4年の比較を行った結果、情緒的要素は1年が2～4年よりも高く、計算的要素は3年が1～2年よりも高く、規範的要素は3年が1～2年よりも高いことを報告している⁹⁾。つまり、情緒的要素は2年目に低下したまま戻らず、計算的要素と規範的要素は3年目に最も高まると言える。このように、先行研究間では、キャリアコミットメントの学年の特性が異なっている。そこで、この点について追試を通して検証する。

看護学生のキャリアコミットメントについて、学生が自分自身の目指している職業について十分な学びを得るとともに、職業的同一性の確立に向けての支援が重要である¹⁰⁾。この点に関して先行研究では、看護学生は学年進行に伴い職業的同一性拡散因子の得点が高くなっていることを示唆している¹¹⁾。さらに、入学後の早い時期から職業に直結した専門科目を学習する学生は、常に看護という職業を意識しており、その結果、学習や学生生活での不適応を起こす可能性がある¹²⁾。つまり、学生の発達を考慮せずに行われていく看護基礎教育は、学生の自我同一性の拡散を引き起こしかねず、結果として現実的環境への不適応や学問への興味・意欲の低下につながると懸念されるのである。

以上を踏まえ、本研究の問いは2点である。1つ目は、看護学生の志望動機は学年進行に伴いどう変化するのである。そして2つ目は、看護学生の看護師イメージとキャリアコミットメントは、学年進行に伴いどう変化するのである。これらを明らかにする目的で、看護系大学を選択する学生たちの志望動機、看護師イメージおよびキャリアコミットメントを調査する。特に、看護師イメージについては、得られたデータから概念を捉えることを試みる。本研究を通して、看護基礎教育での支援方法に関する有用な知見を得ることが期待される。

II. 研究 方 法

1. 調査期間：2020年6月初旬～6月末
2. 調査対象者：看護系大学1～4年生 230名。
3. 対象者の学習背景：1年生は4月に入学してから2か月が経過し看護を学び始めた時期であった。2年生は、1年次1月に基礎看護学実習Ⅰを1週間経験していた。3年生は、1年次の基礎看護学実習1週間と、2年次11月～12月に基礎看護学実習Ⅱを2週間経験し

ていた。4年生は、1年次・2年次の臨地実習の経験と3年次後期から半年間領域別臨地実習を経験していた。

4. 調査方法：各学年別に実施された講義の後に、無記名自記式質問紙調査を実施した。

回収方法は、1年生に対して、経年的変化調査のための縦断研究を視野に入れた方法とした。まず、番号札の入った封筒をランダムに配布した。その後、調査対象者には、番号札に記されている番号を質問紙に記入した後、封筒の表に氏名を記入し番号札のみを中に入れ閉封することを求めた。その封筒は、調査票とは別に指定されたボックスに投函するよう依頼した。その上で、質問紙の回収については、各学年ともに担当教員の鍵の掛かるボックスに投函するよう依頼した。

5. 調査内容：質問Ⅰ～Ⅲで構成されている。

1) 質問Ⅰ：フェイスシートおよび進路選択について

①フェイスシート：年齢、性別、家族に看護職者の有無

②進路選択に関する項目

・1年生：志望動機（8つの選択肢（表2）から該当する項目を1つ選択）、志望程度5件法（5. 非常に強い～1. 全くない）

・2～4年生：志望程度5件法（5. 非常に強い～1. 全くない）、志望変化3件法（3. 強まった～1. 弱まった）、志望変化に影響を与えた人・物（14の選択肢（表3）から該当する項目を1つ選択）

2) 質問Ⅱ：看護師イメージについて

看護師のイメージ尺度として広く用いられている意味微分法（Semantic Differential Method：以下SD法）¹³⁾を採用した。意味尺度の構成は、先行研究を参考に⁹⁾¹⁴⁾、理想と現実の看護師イメージを共通に測定しようと思われる24対の両極性の形容詞を選択し、7件法（どちらでもないを中心に、両極にその距離が隔たるほど、やや・かなり・非常に）とした（図3）。

3) 質問Ⅲ：キャリアコミットメントについて

石田らが作成したキャリアコミットメント尺度16)（情緒的要素8項目、計算的要素4項目、規範的要素3項目）を5件法（5. そう思う～1. そう思わない）で用いた。各因子の信頼性（Cronbach's α ）は、情緒的要素 .81、計算的要素 .71、規範的要素 .90だった¹⁶⁾。

6. 分析方法

はじめに、志望動機と志望程度を検討した。学年による差の比較を行い、志望程度の変化に影響を与えた

人物を分類した。次に、看護師イメージの概念を検討した。最尤法(Promax回転)による因子分析を行い、得られた因子構造に基づいて、各因子に該当する質問項目の平均値を求めて得点とした。最後に、学年による違いを検討するため、看護師イメージの各因子の平均値と、キャリアコミットメントの3因子(情緒的要素、計算的要素、規範的要素)の得点について1要因分散分析を行った。キャリアコミットメントには因子分析を行わず、各因子に該当する質問項目の平均値を算出して得点とした¹⁶⁾。看護師イメージとキャリアコミットメントの分析にあたっては、室津ら⁹⁾をもとに分析計画を立てた。なお、統計処理にはHAD(Ver.16)を用いた¹⁷⁾。

7. 倫理的配慮

調査の目的を説明したうえで、協力を依頼し質問紙を配布した。質問紙については無記名であり、回答内容が成績や評価に影響しないこと、個人のデータは特定されないこと、データを本研究以外に使用しないこと、結果は研究論文として公表することを口頭で説明したうえで、質問紙への回答をもって同意が得られたものとした(旭川大学倫理委員会承認番号2)。

Ⅲ. 結 果

1. 有効回答率

記入漏れがあったり、質問紙のいずれかにおいて、同一の選択肢のみを選んだ回答が全項目数の90%以上を占めたものを欠損値としてデータ分析から除外した。1年生から4年生の回答者158名(1年生46名、2年生31名、3年生45名、4年生36名)のうち、欠損値のない145名(1年生42名、2年生27名、3年生43名、4年生33名)を分析対象とした。有効回答率は91.8%であり、男性14名、女性130名、性別無回答1名、平均年齢20.48±3.10歳(1年生18.4±1.0歳、2年生21.9±5.3歳、3年生20.7±1.4歳、4年生21.7±2.8歳)であった。

2. 看護職に就いている家族の有無

全体では、家族に看護職者がいると回答したのは31名、いないと回答したのは108名、無回答は6名であった(表1)。学年間の有意差はなかった($\chi^2(6)=3.55$, $p=.74$)。

表1 家族の中に看護職者の有無

人数(%)

	1年	2年	3年	4年	合計
いる	10 (23.8)	6 (22.2)	10 (23.3)	5 (15.2)	31 (21.4)
いない	30 (71.4)	19 (70.4)	31 (72.1)	28 (84.8)	108 (74.5)
無回答	2 (4.8)	2 (7.4)	2 (4.6)	0 (0)	6 (4.1)
合計	42 (29.0)	27 (18.6)	43 (29.6)	33 (22.8)	145 (100)

3. 看護系大学を志望した程度・志望変化・最も影響を受けた人・物

1) 1年生において看護系大学への進学理由および志望程度は表2の通りである。「看護職にあこがれたから」が40.5%と最も多いのが分かる。また、図1に1年生～4年生の志望程度を示す。1年生の志望程度としては、「非常に強い」(36%)と「やや強い」(38%)が全体の74%を占めている。2～4年生についても、入学時の志望程度は「非常に強い」と「やや強い」が全体の74%～94%を占めている。

2) 2～4年生の志望変化を図2に示す。いずれの学年も「強まった」と「変わらない」が全回答の79%～82%を占めている。

3) 2～4年生において志望変化に最も影響を与えた人・物を表3に示す。2年生の影響を受けた人・物の回答の合計は19名と、他学年よりも少ない。しかし、患者(3名)および教員(5名)のほかに自身の家族(3名)と回答している学生がいる。3年生は、患者(10名)と教員(9名)と回答している。4年生は、患者(6名)のほか、教員(2名)よりも臨地実習指導者(6名)および病棟看護師(5名)の回答数が多い。

表 2 看護系大学への志望動機（1年生）

人数（%）

1. 看護職にあこがれたから	17(40.5)
2. 家族・教師に勧められた	6(14.3)
3. 資格がほしい	5(11.9)
4. 本命の進学先が受からなくて	2(4.8)
5. 他に進む道が見つけられなくて	1(2.4)
6. 保健師になるために	5(11.9)
7. なんとなく	0(0)
8. その他（将来安定・助産師になるため・家族の病気・看護師の叔母にあこがれ・なりたかった）	4(9.5)
複数回答	2(4.8)
合計	42(100)

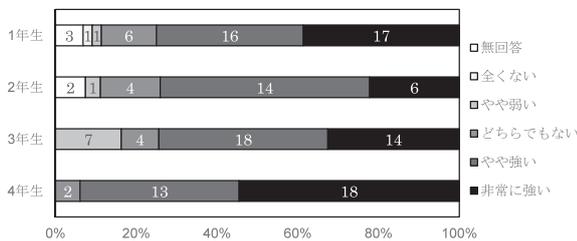


図 1 学年別志望程度

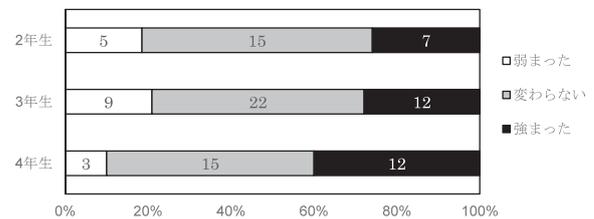


図 2 学年別志望変化

表 3 志望動機変化に最も影響を受けた人・物（2～4年生）

人数（%）

	患者	患者の家族	臨床指導者	病棟看護師	病棟師長	医師	教員
2年生	3 (2.9)	0 (0)	1 (1.0)	0 (0)	0 (0)	0 (0)	5 (4.9)
3年生	10 (9.7)	1 (1.0)	4 (3.9)	5 (4.9)	3 (2.9)	0 (0)	9 (8.7)
4年生	6 (5.8)	0 (0)	6 (5.8)	5 (4.9)	2 (1.9)	0 (0)	2 (1.9)
全体	19 (18.4)	1 (1.0)	11 (10.7)	10 (9.8)	5 (4.8)	0 (0)	16 (15.5)

一緒に実習した仲間	同級生	先輩	家族	実習病棟の雰囲気	病院全体の雰囲気	その他	合計
2 (1.9)	1 (1.0)	1 (1.0)	3 (2.9)	1 (1.0)	1 (1.0)	1 (1.0)	19 (18.4)
4 (3.9)	3 (2.9)	1 (1.0)	5 (4.9)	3 (2.9)	5 (4.9)	0 (0)	53 (51.5)
2 (1.9)	2 (1.9)	0 (0)	0 (0)	3 (2.9)	2 (1.9)	1 (1.0)	31 (30.1)
8 (7.7)	6 (5.8)	2 (2.0)	8 (7.8)	7 (6.8)	8 (7.8)	2 (2.0)	103 (100)

4. 看護師イメージの因子構造

各質問項目の平均値を図3に示す。因子分析の前に天井効果を確認し、最も強い天井効果が認められた項目18（責任感の強い—無責任な）を分析対象から除外した。その上で、最尤法 Promax 回転による探索的因子分析を行った。スクリープロットの推移を参照し、固有値1以上であった因子数を採用した。室津らを参考に、パターン行列に基づく因子負荷量が.40未満、他の因子への負荷量.35以上の質問項目を削除した⁹⁾。この手順を繰り返し、削除する質問項目がなくなったモデルから4因子構造が得られた。しかし、4因

子構造のモデルにおいて、因子4の α 係数(Cronbach's)が.49と著しく低いことから、因子数を3および2とした因子分析も試みた。各モデルの適合度と質問項目数を手がかりに、最も適していると思われる3因子構造を最終的なモデルに採用した(表4)。パターン行列の値をもとに、第1因子を「職業的自律 ($\alpha = .84$)」、第2因子を「興味関心 ($\alpha = .68$)」、第3因子を情緒的魅力 ($\alpha = .80$)とそれぞれ命名した。なお、確認的因子分析によるモデルの適合度は、 $\chi^2(42) = 45.920$, $p = .10$, CFI = .991, RMSEA = .032, AIC = 120.325, BIC = 227.487であった。



図3 学年ごとの看護師イメージ (全学年)

表4 看護師イメージの因子分析結果 (3因子構造)

項目	因子1	因子2	因子3	共通性
因子1 職業的自律 $\alpha = .84$				
24. 積極的な	.81	.12	-.18	.65
10. 意欲的な	.79	.01	-.07	.59
20. 社交的な	.73	-.03	-.07	.47
3. 勤勉な	.67	-.03	-.04	.41
6. 勇敢な	.59	-.19	.20	.37
11. 協調的な	.56	.09	.13	.45
8. 価値のある	.56	.05	.10	.40
21. 理性的な	.42	-.02	.04	.18
因子2 興味関心 $\alpha = .68$				
19. 好きな	.05	.80	-.00	.67
4. おもしろい	-.05	.66	.00	.41
因子3 情緒的魅力 $\alpha = .80$				
7. やさしい	.03	-.17	.97	.82
9. 穏やかな	-.20	.30	.61	.53
5. 温かい	.29	.18	.51	.65
因子1	1.00	.51	.41	
因子2	.51	1.00	.51	
因子3	.41	.51	1.00	

5. 看護師イメージの学年間比較

因子分析の結果に基づき、質問項目の平均を算出して各因子の得点とした。表5は各因子の学年ごとの平均値、標準偏差および分散分析の結果である。因子ごとに、学年を独立変数、得点を従属変数とした1要因分散分析を行った。その結果、「興味関心」と「情緒的魅力」が有意であった（職業的自律： $F(3,141) =$

2.40, $p = .07$, 興味関心： $F(3,141) = 3.25$, $p < .05$, 情緒的魅力： $F(3,141) = 3.00$, $p < .05$ ）。そこで、「興味関心」と「情緒的魅力」について、多重比較（Holm法）を行った結果、「興味関心」と「情緒的魅力」において1年生の得点が3年生よりも有意に高かった（ $p < .05$ ）。

表5 看護師イメージの学年間比較と分散分析結果

	1年生	2年生	3年生	4年生	F (3,141)	P	多重比較 (Holm)
	M (SD)	M (SD)	M (SD)	M (SD)			
職業的自律	6.20 (0.82)	5.86 (0.60)	5.85 (0.74)	5.88 (0.53)	2.40	.07	
興味関心	5.19 (0.99)	4.70 (1.14)	4.52 (1.32)	5.15 (1.01)	3.35	.02	1 > 3*
情緒的魅力	5.34 (1.30)	4.61 (1.24)	4.56 (1.25)	4.77 (1.48)	3.00	.03	1 > 3*

6. キャリアコミットメント尺度の学年間比較

全学年のデータに基づく α 係数(Cronbach's)は、「計算的要素($\alpha = .69$)」がやや低いものの、「情緒的要素($\alpha = .86$)」と「規範的要素($\alpha = .81$)」は概ね良好だった。なお、「計算的要素」について、投入する質問項目を1つずつ削除して再計算した結果、当初の値から.05を上回るものがなかったため($\alpha = .55 - .70$)、全ての質問項目を採用した。因子ごとに学年(1年生, 2年生, 3年生, 4年生)を独立変数、各

因子の得点を従属変数とした1要因分散分析を行った結果、「計算的要素」でのみ、学年の主効果が有意であった（情緒的要素： $F(3,141) = 1.89$, $p = .13$, 計算的要素： $F(3,141) = 2.92$, $p < .05$, 規範的要素： $F(3,141) = 1.99$, $p = .12$ ）。しかし、「計算的要素」について多重比較（Holm法）を行った結果、いずれの組み合わせにおいても有意差は認められなかった。以上の結果を表6に示す。

表6 キャリアコミットメント尺度の平均値、標準偏差および α 係数

	Cronbach's α	M	SD	F (3,141)	p
情緒的要素	.86	1年生	3.77	0.73	1.89
		2年生	3.54	0.84	
		3年生	3.40	0.80	
		4年生	3.67	0.62	
計算的要素	.69	1年生	3.33	0.92	2.92
		2年生	3.86	0.90	
		3年生	3.76	0.74	
		4年生	3.45	0.96	
規範的要素	.81	1年生	3.12	1.28	1.99
		2年生	3.67	1.25	
		3年生	3.62	0.99	
		4年生	3.20	1.30	

注) α 係数は全学年のデータをもとに算出した

IV. 考 察

1. 看護系大学への進路選択から見た学年別の概要

本研究では、看護学生の志望動機、看護師イメージおよびキャリアコミットメントについて、学年による特性を明らかにするための調査を行った。調査対象者の傾向として、1年生の最も多い進学理由は看護職へのあこがれであった。さらに、全学年を通して、入学時の志望動機が強い（非常に強い、やや強い）学生の割合は全体の79%を占めていた。また、2～4年生では、入学直後に比べて志望の程度が「強まった」または「変わらない」者が79%以上を占めている。このことから、看護系大学に入学する学生は、看護師になりたいという強いあこがれと看護師を目指すという強い動機をもって入学し、入学後も強い意志をもって学んでいることが明らかとなった。また、1年生の志望動機の中には、「看護職にあこがれて」という以外に、「資格がほしい」「保健師・助産師になりたい」など職業人としての姿を視野に入れたものがあり、自律した将来像をイメージしていることが伺える。自然科学系の学部の学生は、他学部の学生に比べて専門的な知識・技術の修得や教養を高めることなど、勉学を目的として大学に進学してきた者が多く、特に医歯薬系の学部では、資格・就職志向が強い¹⁸⁾。また、看護系大学への志望動機の構造の一つに「看護志向」が挙げられ、学生は学問としての看護学を学び、看護職に就くことを目指しているとの報告もある³⁾。

学生の志望変化に最も影響を与えた人・物についての傾向として、2年生は、「患者」「教員」のほかに自身の「家族」と回答している学生がいることが特徴的と言える。また、3年生においては、「患者」「教員」と回答し、4年生は、「患者」のほかに「臨地実習指導者」や「病棟看護師」と回答した人数が増えており「教員」が減少している。家族の中に看護職者がいると回答した者は、全体で2割程度となっている。また、1年生の進学理由の中に「家族・教師に勧められた」が14%みられることから、入学当初は家族の影響が大きいものの、学年が進み臨地実習の経験が増えてくると、家族よりも実習環境の要因が大きく影響していると考えられる。このように、臨地実習がキャリアコミットメントに影響を与えることから、学年の特性に合わせた学習の動機づけや支援方法など、教育の工夫が必要であると考えられる。

2. 看護師イメージについて

看護師イメージの因子分析では、「職業的自律」「興味関心」「情緒的魅力」の3因子が得られ、第一因子を「職業的自律」と命名した。「職業的自律」については、学年間の有意差はなかった。つまり、医療系の学生は資格・就職志向が強いとの報告があるように¹⁸⁾、看護を学ぶにあたって入学時から専門性を身につけるという意識を維持しながら大学生活を送っており、結果として、看護師イメージについて、主体性を備えた職業人としてのイメージを継続して抱いていると言える。また、「興味関心」「情緒的魅力」は、1年生の得点が3年生よりも有意に高かった。明るさや優しさといった看護師の外観的なイメージは、専門的な学習が進む中で現実的な厳しさを自覚していくと低下するとの報告からも⁹⁾裏付けられる。しかし、どちらの因子も4年生の得点が1年生と同程度になる。この結果は、学年進行に伴って看護師イメージが低下した先行研究⁹⁾を支持しなかった。調査対象者である4年生には、3年次後期から臨地実習が1年間通して実施されている。臨地実習を経験する中で、直接患者と関わり臨地を肌で感じた実体験から、看護師という職業に対するリアルな面白さや温かさを実感したのではないだろうか。このように、学生にとって看護学実習は学びに向かう姿勢をも変える意義深い体験の場であると言える。一方で、実習は学生にとって十分な睡眠を確保できない¹⁹⁾ほどのストレスフルなものであり、学生が興味関心や情緒的魅力を低下させることなく卒業に向かうには、臨地での質の高い経験が重要である。このことは、その後のキャリアコミットメントの育成に大きく影響するとも言えるのではないだろうか。

3. キャリアコミットメントについて

看護学生のキャリアコミットメントについて、臨地実習の経験の有無が影響していることが示唆されている¹⁶⁾。つまり、看護学を学んでいたとしても、直接患者と関わったり臨地で働く看護師の姿を目の当たりにする機会を得られないことは、学びを深められないと解釈できる。ところが、本研究の結果、「情緒的要素」「計算的要素」「規範的要素」において、いずれの組み合わせでも学年間の有意差は認められなかった。ただし、先行研究¹⁶⁾では、1～3年の平均得点が情緒的要素(3.69±0.58)、計算的要素(3.69±0.88)、規範的要素(2.38±1.22)であったのと比べると、本研究の各学年の計算的要素と規範的要素の平均は0.54～1.29高く、1年目から高い傾向にあるために上昇幅が小さ

いことが推測される。さらに、キャリアコミットメント尺度の理論的中央値 (3) を基準としてみると、全ての学年における平均値は理論的中央値を上回っていた。同時に標準偏差から、学年間の差よりも学年内の個人差によるところが大きいかことが明らかである。今回の調査は、1年生は臨地実習を行う前であり、2年生・3年生においては短期間の基礎看護学実習のみ経験している時期であった。しかし、4年生は一定の臨地実習経験がある。このように、経験差があるにも関わらず量的な差が見られなかったのは、自分の経験の中で看護をどう認知しているかによるのではないかと考えられる。さらに、臨地実習だけではなく、座学での学びも同様に自分のキャリアの中でどう位置付けるか、その差がキャリアコミットメントの学年内個人差として現れたのではないだろうか。しかし、この考察は、本調査のデータから裏付けられるものではない。そこで、今後は、質的な検討を含めさらに調査していく必要があるだろう。

V. 結 語

本調査における看護系大学生は、看護職にあこがれ、それを将来の職業につなげるという目的意識をもって入学していることが明らかとなった。

また、看護師イメージの因子分析により、「職業的自律」「興味関心」「情緒的魅力」の3因子が抽出された。看護師イメージの学年間比較では「職業的自律」においては有意な差は見られないが、「興味関心」「情緒的魅力」において1年生の得点が3年生よりも有意に高かった。キャリアコミットメントの学年間比較では、いずれの組み合わせにも有意差は認められなかった。以上を踏まえて、看護基礎教育において、そのような学年の特性を考慮した支援方法の工夫が求められるだろう。

最後に、本研究の課題を挙げる。A大学の学生のみが対象であり、結果を一般化するには限界がある。また、横断的調査であるため、各学生の特性を踏まえた教育支援を実施するには、個人間差と個人内差の比較を意図した縦断的調査からの検討も必要だと考える。

引 用 文 献

- 1) 日本看護協会：生涯学習支援（看護師のクリニカルラダー）
<https://www.nurse.or.jp/nursing/education/jissen/ladder/index.html>
(2020.3.20)
- 2) 文部科学省：今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申），2011.
https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm (2020.8.28)
- 3) 竹本由香里：看護学生の看護系大学への進学志望動機の検討，宮城大学看護学部紀要，11 (1)，13-20，2008.
- 4) 藤岡喜愛：イメージその全体像を考える，日本放送出版協会，3，1983.
- 5) Boulding, K. E. 大川信明（訳）：ザ・イメージ，誠信書房，4，1984.
- 6) 石川ひとみ・石井範子：看護職の学習行動と組織・専門コミットメントとの関係性，秋田大学保健学専攻紀要，20 (1)，31-41，2012.
- 7) Allen, N.J., & Meyer, J.P.: The measurement and antecedents of affective, continuance and normative commitment to the organization. *Journal of Occupational Psychology*, 63, 1-18, 1990.
- 8) Blau, G. J.: The measurement and prediction of career commitment. *Journal of Occupational Psychology*, 58, 277-288, 1985.
- 9) 室津史子・贅育子・重本津多子・今村美幸・藤原理恵子：看護学生の看護師に対するイメージおよびキャリアコミットメント—学年による比較—，ヒューマンケア研究学会誌，5 (2)，37-44，2014.
- 10) 室津史子・重本津多子・羽山美和・友安由貴子・今村美幸：学年進行に伴う看護学生の看護師イメージおよびキャリアコミットメントの変化，健康科学と人間形成，2 (1)，55-63，2016.
- 11) 安藤祥子・内海滉：看護学生の自我同一性に関する研究—職業的同一性形成を規定する教育的要因—，日本看護研究学会雑誌，18 (3)，7-19，1995.
- 12) 矢野紀子・羽田野花美・酒井淳子・澤田忠幸：看護系大学生の職業コミットメント—入学後2年間における継続的变化—，愛媛県立医療技術大学紀要，3 (1)，59-65，2006.
- 13) Osgood, C.E., Suci, G.J., & Tannenbaum, P.H.: The measurement of meaning. *University of Illinois Press*, 1957.
- 14) 鈴木美代子・井上都之・高橋有里・三浦奈都子・及川正広・平野昭彦・菊池和子：看護学生の看護のイメージと個人要因との関連について，岩手県立大学看護学部紀要，14，33-48，2012.
- 15) 石田真知子・柏倉栄子・杉山敏子：看護学生のキャリアコミットメント尺度の検討，東北大学医療技術短期大学部紀要，8 (1)，87-83，1999.
- 16) 石田真知子・柏倉栄子・杉山敏子：学年進行に伴う看護学生のキャリアコミットメントの変化，東北大学医療技術短期大学部紀要，10 (2)，83-89，2001.
- 17) 清水裕士：フリーの統計分析ソフトHAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案，メディア・情報・コミュニケーション研究，1，59-73，2016.
- 18) 古市裕一：大学生の大学進学動機と価値意識，進路指導研究，14，1-7，1993.
- 19) 吉澤裕子・山田直行：精神看護学実習における看護学生の睡眠時間と実習記録の取り組みおよび充実感との関連，旭川大学保健福祉学部紀要，12，1-5，2020.